

地にさしてそれから樹木が生長したといふ話で、それがイテフの枝のことになつてゐるのが宋の天子高宗が南渡の途中に浙江省の崑山縣の貞義里といふ或村で、宮臣の一人が、イテフの枝を地面にさして、若し此の枝が土に着いて活を得るならば自分はここに居らうといつた所が、その枝が段々生長して大樹となつて繁茂した。といふ傳説が崑山縣志に載つてゐる。さういふ様にイテフは宋から聞えて、詩文や畫題をはじめ傳説や逸話にも續々あらはれてくるが、本草書にはまだ録せられてなかつた。銀杏が本草に載りはじめたのは、元の李東垣の食物本草、同じく吳瑞の日用本草からであつて、宋の世に著名な二三の本草書には未だ登録されなかつたのである。

食物本草によれば、古名が鴨脚樹であつて、當代には銀杏の名が通稱であつた。元以前でも恐らくはさうであつたらうと思ふ。元のころ既に白果とか白眼とか靈眼とかいふ名また仁杏といふ異名もあつた。生殖の神秘に關する觀察の如きも既に蘇東坡の物類相感志に見えるが、この著が果して東坡のものであるか否かは不明であるにしても、この植物が東坡時代によく知られたといふ反映にはなるであらう。

イテフは支那に於ては其葉形によつて鴨脚と名づけられ、其果の色によつて銀杏と呼ばれた。其他後世の異名であるが、公孫樹とも云はれる。イテフの種子は老木でなければ出来ないから、孫の代に實のると云ふ意味でつけられたのである。字音として公孫樹と云ふ文字は佳い。日本では銀杏をギンナンと支那の近代音を音便で呼んでゐる。イテフと云ふ語は宗代の鴨脚の發音ヤーチャオがイテフと轉訛したものである。

本邦の野生菊の新産地

北村四郎

1) *Chrysanthemum nipponicum* MATSUM. ハマギクが其の南の分布は常陸に及ぶ事は木村有香氏が助川海岸にて 1929 年 II 月 22 日採集されし事により明かとなつた。

2) *Chrysanthemum boreale* MAKINO キクタニギク、アワコガネギク、アブラギク(舊稱)の北への分布は陸前の宮戸島に及ぶ事は 1929 年 II 月 3 日木村有香氏の採集に依り正確となつた。尙この菊は朝鮮、滿洲にも分布すれども北支那に及ばず同地の *Chrysanthemum lavandulaefolium* MAKINO とは區別すべきである事は既に日支の學者に依り近年認められた。

3) *Chrysanthemum indicum* L. アブラギク、シマカンギクが山城に産する事は筆者が今秋京都市内比叡山ケーブルの附近の崖に自生してゐるのを澤山見て確信を得た。

4) *Chrysanthemum japonense* var. *debilis* KITAMURA, セトノギクの自生地大塩附近の

的形村といふ片田舎の崖を歩きまわつて、筆者の観察したところを少しばかり書きとゞめる。牧野博士のお話によつて既に變異の甚だしい事は一般に知られてゐるが、多數自生してゐる地を一本一本見てまわると、その變異は實に大變なものでこれ等小さい變異は恐らくかゝる系統があるのであらうと思はれる。これ等多數の系統を一つ一つ區別して記載してゐたら限りがないから、其の中特に注意をひくものとか極端なものを述べる。それで先づ植物研究雜誌第八卷九、十號の扉繪 天然 = 出現シテキルのぎく頭狀花ノ種々相甲、乙、を参照され度い。この圖の一つの花が（牧野博士はさうとは書いておられぬが、筆者の見たところでは）一株の及び其の株より分れたと見られる植物群に就いて Constant であつて、一株に種々の型の花が咲くといふ彷徨變異ではないのである。

f. flavescens (淡黄花) も少しあつたし、白色のものが多いが花が終りに近づくと即ち古くなつた花瓣は紅色を帯びる。筆者の見たものゝ中にはこの圖の 12 よりもつと少く、舌狀花が非常に不完全であつて殆んど目につかず、一見筒狀花のみよりなるイソギクに似たものを見たが、この株は全部がこんな花を着け、附近の四、五株も亦全部こんな不完全な花を着けてゐる。それでこれを *f. incompletum* として區別する。

Daphne nana TAGAWA, neue Art aus Formosa

Von

Motozi TAGAWA

田 川 基 二 : 臺灣産ゲンチヤウゲ屬の一新種

Daphne nana TAGAWA, sp. nov.

Fruticulus circ. 20 cm. altus, dichotome vel trichotome vel subverticillatim ramosus, rami castanei glaberrimi subnitidi, ramuli circ. 1.5 mm. lati. Folia alterna subcrasse chartacea brevissime petiolata (petiolo anguste alato), oblonga vel oblongo-lanceolata vel raro obovato-oblonga, apice emarginata obtusa vel rotundata, basi cuneata margine integra 15–25 mm. longa et 7–10–(14) mm. lata utrinque glaberrima, costa venisque supra impressis subtus elevatis. Flores albi pedicellati capitati, pedicellis circ. 2 mm. longis glaberrimis ad medium articulatis, capitulis ad apicem ramulorum terminalibus 5–8-floratis inter florem bracteatis, bracteis deciduis caducissimis ovato-oblongis circ. 1 mm. longis margine parce apice dense ciliatis. Perianthii tubus glaber urceolato-cylindricus 3 mm. longus 1.5 mm. latus basi rotundatus ad apicem plus minus attenuatus, limbo rotato-campanulato 4-lobato lobis late ovatis